

復活節第2主日(神のいつくしみの主日)

第一朗読 使徒言行録 5・12-16

第二朗読 黙示録 1・9-11a、12-13、17-19

福音朗読 ヨハネ 20・19-31

2025.4.27 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
イエズス会 アン助祭

共同体の皆さん、今日は「神のいつくしみの主日」をわたしたち皆でともに祝いしています。

神のいつくしみは、わたしたちの人生において何よりも大切なものです。この確信があるからこそ、わたしたちはこう言うことができるのではないのでしょうか。「もし神がそのいつくしみを示してくださなければ、わたしたちは生きていくことさえできない」。詩編にもこの確信はこう表現されています。「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐えられましょう」(詩編 130・3)。だからこそ、神の愛といつくしみをともに黙想し、心から受け止めていくことには、非常に大きな意味があるのです。

今日のヨハネ福音書では、復活の主イエスに出会う前に、弟子たちがどのような状態にあったかが描かれています。彼らは、恐れと不安に押しつぶされていました。自分たちもイエスと同じように、捕らえられ、殺されるのではないか——そんな思いに捕われ、家の戸に鍵をかけて閉じこもっていたのです。

けれどもそれは、ただの外的な行動ではありません。その「鍵をかけた戸」は、弟子たちの心の状態そのものでもありました。思い返せば、あの受難の夜、彼らは皆、イエスを見捨てて逃げてしまいました。主を否定し、背を向けてしまったのです。その記憶は、彼らの中で深い後悔と罪悪感となって残っていました。「自分たちは主を裏切ってしまった。もう赦される資格などない」、そんな思いが彼らの心を閉ざしていたのです。

しかし、まさにその弟子たちのもとに、復活したイエスが現れ、彼らにこう言われました。「あなたがたに平和があるように」。イエスは、責めることも、問いただすこともなさいませんでした。ただ、「平和があるように」と、静かに、深

く、語りかけてくださいました。これはまさに、「神のいつくしみ」の表れです。弱さを、裏切りを、恐れを——すべてを抱きしめるような、限らない愛。そのいつくしみの言葉が、弟子たちの閉ざされた心を少しずつ開いていったのです。

とはいえ、復活のイエスに出会った後も、弟子たちの中にはなお疑いや迷いが残っていました。彼らは鍵をかけた家の中に留まり続けていたのです。それほどまでに確信が持てなかった彼らは、その日そこにいなかったトマスに、「主は復活された。わたしたちは主を見た」と伝えても、彼を納得させることはできませんでした。

でも、イエスは、そんな彼らを見放しませんでした。もう一度、愛をもって彼らに寄り添い、導かれたのです。神は、わたしたちの弱さを知っておられます。そして、失敗し、傷つき、心を閉ざしてしまうわたしたちにも、決してあきらめることなく、手を差し伸べてくださるのです。弟子たちは、そんな神のいつくしみを体験しました。だからこそ、彼らの人生は変わっていったのです。

恐れの中に閉じこもっていた彼らが、やがて大胆に福音を語り、命を懸けて主を証ししていく者へと変えられていきました。その変容の出発点は、「赦しの経験」——「神のあたたかいまなざし」を受け取ったことでした。

今日、わたしたちもまた、この主イエスの言葉を聞いています。「あなたに、平和があるように」。この平和、この赦し、このいつくしみは、今日のわたしたち一人ひとりに向けられています。閉ざされた心の戸があるならば、その扉の前に立ち、優しく呼びかけておられるイエスの声に耳を傾けましょう。「あなたに、平和があるように」。この言葉から、新しい始まりが、わたしたちにも与えられていきます。

皆さん、イエスが弟子たちの前に現れたとき、主はご自分の傷を見せられました。特に、疑っていたトマスにはこう呼びかけます。「あなたの手をここに伸ばして、わたしの傷に触れてごらん」。この傷は、イエスがどれほどわたしたちを愛してくださったか、命を捧げるほどの愛を注いでくださったかを示す、まぎれもない「しるし」です。主の傷に触れる——それは、神の愛に触れることです。神の優しさ、神の親しさに、全身で包まれる体験です。

トマスは、他の弟子たちよりも遅れて復活の主に出会いました。しかし、主の傷に直接触れ、愛といつくしみに包まれたことで、彼の心は深く揺さぶられます。そして彼は、あの有名な信仰の告白をします。「わたしの主、わたしの神よ！」

この短い言葉の中に、トマスの心の変化、深い信仰が込められています。「わたしの」と繰り返しているのは、神を所有しようとしているのではありません。神との深い結びつきを、彼が心と体で感じ取ったということなのです。神は、「わたしのために」人となられ、「わたしのために」苦しみ、「わたしのために」死に、そして「わたしのために」復活されました。その神こそが、わたしの命であり、わたしの光であり、わたしの愛なのです。このときトマスは、かつての「疑い深い弟子」ではなく、主を深く慕う、「信じる者」へと生まれ変わったのです。

皆さん、「神のいつくしみの主日」を祝う今日、わたしたちの前にも、神の限らない愛といつくしみの世界が広がっています。神の愛、神の赦し、そして神のいつくしみ。でもわたしたちは、その神のもとに本当に走り寄っているでしょうか？ 神の愛に、心から触れたい——そう願っているのでしょうか？

説教を終えるために、神のいつくしみの使徒であるフランシスコ教皇を思い起こしながら、教皇が語る愛といつくしみについての教えをともに聞きましょう。

「神の顔は、わたしたちに対して深いいつくしみと忍耐を持つ父の顔です。神はわたしたちを知り、待ち続け、わたしたちが立ち返るとき、決して疲れることなく赦してください。神は決して赦すことに疲れません。ただ、わたしたちの方が、神のいつくしみを願うことに疲れてしまうのです」（2013年3月17日「お告げの祈り」より）。

この教皇の言葉は、わたしたちに「決してあきらめてはならない」と呼びかけています。神からのこの尽きることのない贈り物を、何度でも、何度でも、求め続けましょう。閉ざされた戸の前に立ち、わたしたちの心を優しくたたいておられる主の声に、今日こそ応えましょう。祈りのうちに、ともに歩み続けましょう。そして、「神のいつくしみ」に生かされる者として、わたしたちもまた外に出かけ、福音を告げ知らせていきましょう。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>